

【「リュミエールの不思議な絵本」冒頭】



『むかしむかし、美しい海辺に「リュミエール」という名の街がありました。街の中心には「ルミナスオーブ」と呼ばれる球体が輝いていて、住民たちが紡ぎ出す物語を集めては魔法の光を灯していたのです。夜になると、その光は街中をやさしく包み、住む人々の心までもあたためていました。その光景はまるで夢のようで、街を歩く誰もが幸せな気持ちでいっぱいでした。

リュミエールの人々は、日々の暮らしの中で感じるあたたかな心を、街に語り継がれる「リュミエールの不思議な絵本」のページに映し出していました。そのひとつひとつのページが、オーブの光を育む源となり、街の輝きはいつまでも続いていく…はずでした。

ある時、どこからともなく「黒い影」が忍び寄り、住民たちの心にそっと入り込んだのです。人々は次第に心に距離ができ、互いに関わり合わなくなってしまうしました。すると「リュミエールの不思議な絵本」のページはどんどんと失われ、「ルミナスオーブ」の光も弱まっていき、街には暗く寂しい影が広がり始めたのです。

このままではいけない！と立ち上がったのは、街に住む魔法使いや商人、職人、吟遊詩人、そして探偵たち。彼らは、かつての美しいリュミエールの輝きを取り戻すため、失われた絵本のページを集めて黒い影たちを退けることを決意しました。』

……と、あなたが絵本を読んでいると、その先のページがないことに気づきます。

その瞬間、目の前が真っ白な光に包まれ、気がつくとあなたはリュミエールの街に立っていました。

【はじめに】

このイベントであなたはサンティエ・ルクレールが書いた「リュミエールの不思議な絵本」の世界に引き込まれ、自らの役割を演じながら黒い影を見つけ出し、失われた絵本のページを集めていきます。それぞれの役職が持つスキルを活かしこの絵本に隠された謎を解き明かしましょう。

あなたは無事にルミナスオーブを再び輝かせ、リュミエールの街に光と人々の絆を取り戻すことができるでしょうか？そして、元の世界へ戻ることができるのでしょうか？

■設定資料

【サンティエ・ルクエール】

「リュミエールの不思議な絵本」の作者。絵本の世界において長く語り継がれる存在でありながら、その素顔を知る者はほとんどいないと言われる、謎めいた絵本作家。

彼が手がけた作品は数多く、いずれも心に深く響く物語と、どこか儚げで美しいイラストが特徴です。しかし、サンティエは表舞台に立つことを好まず、インタビューや公式の場に姿を現すことは稀で、一般に彼の経歴や顔は知られていません。そのため、彼の作品にファンが多い一方で、「実在しない伝説の作家ではないか」という噂までささやかれるほどです。

【街の設定】

リュミエールの街は、海に面した美しい赤れんがの建物が並ぶ街。かつては魔法の光に満ち溢れ、賑やかな市場や祭りが連日行われていました。火が使えないこの街では、ルミナスオーブが唯一の光源であり、その輝きは街の住人たちに安心と希望を与えていました。

魔法使いや職人、商人、吟遊詩人など、さまざまな職業の住人たちが共存し、日常的に魔法の出来事が起こる街でしたが、最近ではその魔法の光も弱まり、暗く寂しい雰囲気が漂い始めています。

【ルミナスオーブ】

■オーブとはいったいなんなのか

人々の絆や思い出に満ちた「記憶」をエネルギー源とする魔法の球体。

街の住人たちが互いに助け合い、支え合うことで絵本にページが生まれ、絵本が血管のような役割となってオーブに魔力が宿り街を照らす光が生まれます。

そしてただの光源ではなく、街のさまざまな動力炉になっています。オーブが輝くことで住人たちは互いの気持ちを分かち合い安らぎや元気を感じられる街の心臓のようなもの。

■オーブの光がなくなるとどうなるのか

完全に光が消えると街は消滅する。黒い影に飲み込まれたエリアは徐々に色や音、温もりを失い、街の人々も言葉や感情を失ってしまう。住民たちは淡々と過ごすだけになり、街はただの「灰色の絵」となってしまう。（一角だけそういう表現のエリアあっても面白い？難しいですかね^^;）

■街の人にとってオーブとはどういう存在なのか

住民たちはオーブの光を見て「今日もみんなが繋がっている」と安心感を覚える。特に大人や年配者は、

オーブがあることで愛や絆が守られていると感じる風習が根付いている。天災がきた時に「祟りじゃ〜！」と必死に拝む感覚？

■オーブが弱まるとそれは現実世界の我々にとってどういう影響があるのか

自分たちがリュミエールの世界へ迷い込んだように、どこかしらで異世界と現実世界が繋がっているのかもしれない。コドクたちは我々の世界にも侵略してくるかもしれない。

今ここで退治しておかないと、我々の街も消滅してしまうかも！

【絵本の歴史】

リュミエールの街には、代々語り継がれてきた「リュミエールの不思議な絵本」が存在していました。この絵本には、街の歴史や住民たちが築いてきた絆、心温まる出来事が記されており、その絆の記録こそがルミナスオーブに力を与える源でした。

しかし、黒い影にとり憑かれた人々は心に距離ができ互いに関わらなくなってしまいました。

当然思い出もあたたかな心も生まれず、絵本はページを失い、バラバラになってしまいました。その結果、ルミナスオーブも力を失い、光が消えかけているのです。

【失われたページ】

絵本のページは、街の住人たちの絆や記憶を象徴するものです。バラバラになったページを再び集めることはすなわち、人々が忘れかけた思い出や友情を再発見し、取り戻すことを意味します。

来場者たちは街の住人になりきり、街の店舗や施設、街角に隠された絵本のページを見つけ、街の記憶を再び紡いでいくのです。これにより、街全体がかつての輝きを取り戻し、ルミナスオーブが再び光を放つ日が訪れるでしょう。

【ページを集めるとオーブが復活する理由】

絵本のページをすべて集め、物語が完成することで、街の人々の絆が再び結ばれます。これが、ルミナスオーブが再び輝きを取り戻す理由です。

オーブの光はただの魔法の力ではなく、人々が共に過ごし、支え合い、絆を築いてきた「人との繋がり」そのものです。来場者が協力し、絵本のページを集めていく過程で、街にかつてのような温かな光が戻り、街全体を包み込むでしょう。

【裏テーマ解説】

このイベントの裏テーマは、「孤独」という社会問題に光を当て、人々の繋がりや絆の再生を目指すものです。リュミエールの街で魔法の光が弱まったのは、街の住民たちが互いに心の距離を感じ、孤独を抱えるようになったからです。

参加者たちは役職を持ち、他の来場者や出展者とのコミュニケーションを通じて絆を築き、その結果街に再び光が戻るのです。

絵本のページを集めるという行為は、ただの物語の完結ではなく、人々が再び心を通わせ、互いに支え合うことの大切さを学ぶ過程を意味します。

【個性の重要性】

このイベントでは、来場者がそれぞれの役職に取り組むことで、街の光を取り戻すことができます。それぞれの役職には特有のスキルや興味が必要です。魔法使いは SNS の使い方が得意であり、商人は取引や会話を楽しむことができ、職人は物作りに情熱を持ち、吟遊詩人は音楽や詩で人々を楽しませ、探偵は謎解きや情報交換の交渉に挑むことが得意です。

重要なのは、来場者一人ひとりが自分の強みや興味を活かし、役職を全うすることです。全員が同じスキルや興味を持つ必要はありません。それぞれが持つ個性や得意分野を活かし、役職を楽しむことで、街の光を取り戻すための力となります。この多様性と人との繋がりこそが、街の魔法を再生させるカギです。

私たちは、すべての人が違うことを尊重し、個性を大切にすることが、街の未来を明るくする力になると信じています。あなたの個性を発揮し、イベントと一緒に楽しみながら、街の光を取り戻しましょう。

【エンディング】

ページが集まり絵本が完成すると、街の中心にある「ルミナスオーブ」が再び輝き始めます。しかし、その光は単なる魔法の力ではありません。オーブの光は、参加者たちがイベントを通じて築いた「人との繋がりや絆」そのものです。

街の住人たちが協力し、対話し、支え合うことで、絆が生まれ、その絆が新たな光を生み出しました。このエンディングによって、「本当の魔法は、人々が互いに支え合い、繋がることで生まれる」というメッセージを伝えたいと思います。

しかし、黒い影が完全に消え去るなんて、本当にあるのでしょうか…？

【シークレットページ】

静かな夜のリュミエールの街を背にして、一人の老人がゆっくりと歩き出します。彼の名前はサンティエ・ルクレール。彼こそが、「リュミエールの不思議な絵本」の作者であり、リュミエールの街を影から支えてきた人物なのです。

街の隅に小さな影たちが、名残惜しそうに佇んでいます。彼らは街に現れた黒い影、コドクたち。人々の心の中にひそんでいた寂しさや不安が形となって生まれた存在です。ルクレールは優しい目でコドクたちを見つめると、「さあ、行こうか」と、穏やかに微笑みかけます。影たちはルクレールの後ろに集まり、彼の足跡を追うようについて歩き始めました。

彼らがどこに向かうのか、それは誰にも分かりません。しかし、彼の後ろ姿はどこか懐かしく、温かいものでした。そして、ルクレールの口から静かに言葉がこぼれます。

「人が心に光を灯すたび、君たちはきっと新しい姿で生まれ変わるんだろうね。だからまた会おう。きっと、やさしい光の中で。」

【各役職の紹介ページ】

① 魔法使い (Wizard)

- スキル: 魔法の知識や技術を持つ存在。[スマホ]という魔法の道具を使い、特定の「魔法の言葉（ハッシュタグ）」を SNS で拡散することでページを獲得します。
- 個性: ネット（魔法）を使いこなす力が重要。魔法使いの役割は、街の情報を広めたり、住人のフォロワーを増やすことで人とのつながりを取り戻す手助けをします。
- 特定ワード: 魔法の光を呼び覚まそう！

② 商人 (Merchant)

- スキル: 交易を支える。店舗で「商人の証（役職ページに掲載）」を見せ、その店舗で売られている商品について会話することでページを獲得します。
- 個性: 店舗スタッフとの対話が重要です。商人は、取引や会話を通じて街の経済を活性化し、ページを集める役割を担います。
- 特定ワード: 良い取引で街を明るく！

③ 職人 (Artisan)

- スキル: 街の道具や建物を作る。特定の場所で「作業（ワークショップなど）」に参加し、物作りを通じてページを獲得します。

案1→出店者のワークショップに参加

案2→運営側が用意した何か共同作業のようなものに参加

- 個性: クリエイティブな作業に興味を持つことが重要です。職人としての役割は、実際の作業や共同作業を通じて、街に新たな価値を加えます。
- 特定ワード: 美しい作品が街を支える！

④ 吟遊詩人 (Bard)

- スキル: 音楽や詩で人々を繋ぐ。映像ショーや音楽イベントに参加し、感想やおすすめの店舗紹介を行うことでページを獲得します。

案1→映像ショーや音楽に関連したイベントに参加しページを獲得。

案2→会場のどこかにスポット？を作り、そこでイベントの感想やおすすめの店舗紹介をする（マイクで？カードか何かに書いて大きな掲示板とかに貼る？）

- 個性: 音楽や映像・伝承に興味を持つことが重要です。吟遊詩人は、街の文化やエンターテインメント情報を人々に伝え、絵本のページを集める手助けをします。
- 特定ワード: この声で街を照らそう！

⑤ 探偵 (Detective)

- スキル: 隠された謎を解き明かす。会場内に散りばめられた謎を発見し、解答を記入することでページを獲得します。

案1→会場内に散りばめられた謎を発見・解答を記入・スタッフに渡してページを獲得。

案2→探偵のバインダーには特定のページを固めて入れておく。別の探偵（もしくは店舗）と交換しあわないと他のページを集められない。とか？

■個性: 観察力と情報交換が重要です。探偵は、ミステリーを解決することで、街の秘密を暴き、ページを集める役割を担います。

■特定ワード: 謎を解けば光が見える！

【悪役「黒い影」】

概念的な孤独の要因を悪役キャラクター化させる。リュミエールの住人たちはこれに取り憑かれているせいで孤独を感じている。役職のキャラクターたちが固有のワードを放つと悪役キャラクターは消え去り、ページをもらえるという流れにする。

住民たちが互いに関わることをやめ、心の距離が生まれることで孤独が彼らの精神を蝕んでいます。

街には「黒い影」と呼ばれる存在が蔓延っており、彼らの心をさらに孤独にしています。

忙しさの化身「イソガシ」は、住民たちの時間を奪い、他者との交流を遮り、常に何かに追われている印象を与えています。

さらに、不安の影「フアン」は、住民たちに恐れを植え付け、耳元でささやくように不安を煽り、明確な原因がないにもかかわらず彼らを孤立させています。

無関心の精霊「シラナイ」は、住民同士の交流を妨げ、彼らに無関心を示して絆を弱め、孤独を広げています。

そして、恐れ of 魔物「キョーフ」は、過去のトラウマを思い起こさせ、住民たちを互いに疑い合わせることで孤立を助長します。

競争の鬼「ヒカク」は、住民たちを対立させ、自身の存在感を強めることで、助け合いから遠ざけています。

イソガシ（忙しさの化身）

外見: いつも時計を持ち歩きせわしなく動き回る小さな影。目は焦っているように見え、周囲に人を急かすオーラを発する。

性格: 常に何かに追われている印象を与え、人々が心の余裕を持たないように仕向ける。住民たちの時間を奪い、他者との交流を遮る。

フアン（不安の影）

外見: 霧のようなぼんやりとした形。周囲の空気が重くなるようなオーラを持っている。常に耳元でささやくような声を出す。

性格: 他人の噂やネット情報を元に、住民たちの心に不安を植え付ける。明確な原因がないにもかかわらず常に恐怖を煽り、住民たちを孤立させる。

シラナイ（無関心の精霊）

外見: 住民の周囲を漂いながら、彼らに無関心を示す。目がどこか遠くを見つめているようで、他人に対する関心を持たない。

性格: 無関心を助長し、住民同士の交流を妨げ孤独を広める。

キョーフ（恐れ of 魔物）

外見: 口が赤く光る恐ろしい影。周囲に暗い雰囲気をもたせ、住民たちを恐れさせる。

性格: 過去のトラウマや失敗を思い起こさせ、人々の心に恐怖を植え付ける。人々を互いに疑い合わせ孤立させる。

ヒカク（競争の鬼）

外見: 天秤のような形で常に他者と競り合うような態度をとり、周囲に挑発的な雰囲気をはきまします。

性格: 競争心を煽り、住民たちを助け合うことから遠ざけ、孤独を生む

【共通物語】

■01 （イソガシ）

アレナはおっとりとした性格で、自然の空気のなかで紅茶の時間を楽しむのが好きな人でした。

しかし、最近では急に忙しくなり、いつも何かに追われているような気持ちになるのです。家事や仕事、あれこれやらなければならないことが増えて、気持ちに余裕のない日々を送り、息つく暇もありません。

ある時、友人のルーカスはアレナのおかしな様子に気づきました。

「最近なんだか元気がないね」と声をかけた彼に、アレナは「なんだか毎日が忙しくて、休む暇もなくてね...」と答えます。

ルーカスはほほえみ「めずらしい茶葉をもらったんだけど、一緒にお茶でもどう？」と提案しました。最初はそれどころじゃないと断ろうとしたアレナでしたが、彼の優しい声に心がほぐれ、久しぶりに休憩することにしました。

ベンチに座りながら紅茶を飲むと、アレナはふと気づきます。いつも感じていた焦りやプレッシャーが、少し和らいでいるのです。「何かに追われていたのは、きっと私の思い込みだったのかもしれない...」と彼女はつぶやきました。ルーカスのほんのひと言が、アレナの心を救ったのです。

◎

「アレナ、なんだか顔が真っ青だよ。」

友人のルーカスにそう言われ、アレナは初めて鏡を見ました。

ここ何ヶ月も忙しさに追われ、ろくに休んでいなかった彼女の目の下には大きなクマができていたので

す。

「いやだわ、恥ずかしい。なんだかあれやこれやと仕事が増えるばかりで、気持ちに余裕がなくて...。」ルーカスに疲れ切った表情を見られるのが嫌で、アレナは手で顔をそっと隠します。

その様子を見て何か言いたげなルーカスでしたが、しばらくして「めずらしい茶葉をもらったんだけど、一緒にお茶でもどう？」と提案しました。

「気持ちは嬉しいけど、今それどころじゃ...」とアレナが言い終わらないうちに、ルーカスは彼女の手を引いてテラスの席へ座らせます。

戸惑うアレナでしたが、テキパキとティータイムの準備を進める彼の様子を見て、「負けたわ」と森の方へ視線を流しました。

木々の隙間から揺れる陽の光、小鳥のさえずり、肌を心地よく撫でる風、花と紅茶の甘い香り。ゆっくりと自然が彼女の五感へ語りかけます。

それは本来のアレナが心から愛していた時間でした。「私、一体何に焦っていたというのかしら...。」ポツリとこぼす彼女にルーカスは微笑み、淹れたての紅茶を差し出すのでした。

■02（ファン）

ミーナは明るく自分の意見をはっきり持っている子でしたが、いつからか他人の噂話に心を悩ませるようになってきました。人の視線が気になって思ったことも言えなくなり、やりたいこともできなくなってしまったのです。特に最近、誰かが自分のことを悪く言っているような気がして、不安で胸が重くなるばかり。「みんな、私のことをどう思ってるんだろう？」そんな考えが頭から離れず、ミーナはどんどん外に出るのが怖くなり、笑顔も減っていきました。

ある時、心配で家を訪ねてきた友だちのエリカに、涙しながら不安な気持ちを打ち明けます。

エリカはミーナの手を握り「みんながどう思うかよりも、ミーナがどうしたいかが大切だよ。大丈夫、誰に悪く言われたって、私は味方だから。」と話しました。その言葉は、まるで心の重荷をそっと取り除くようにミーナの胸に響きました。

「私がどうしたいか...」とつぶやくと、自分を心配してくれる大事な友だちの手の温もりが全身に伝わってきて、自分の気持ちを大切にしようと思えたのです。彼女の一言がミーナの心を救い、不安から解放してくれたのです。

◎

「黙ってちゃわからないでしょ。自分の思っていることをはっきり言いなさい！」

声が出なくてうつむくミーナは、ただただ涙を流すことしかできませんでした。

元々は明るく自分の意見をはっきりと言える子でしたが、いつからか他人のウワサ話や人の視線が気になって思ったことを言えなくなってしまったのです。

嫌われるかもしれない、怒られるかもしれない、ダメな子だと馬鹿にされるかもしれない。そう思うと、不安で胸が重くなるばかり。

「みんな、私のことをどう思っているんだろう？」そんな考えが頭から離れず、ミーナはどんどん外に出るのが怖くなり、笑顔も減っていきました。

ある日、友だちのカリンが様子を見に家を訪ねました。はじめは黙り込んでいたミーナでしたが、じっと見つめるカリンに負けてポツポツと言葉を吐き出します。

話を聞き終えたカリンはミーナの手を握り「みんながどう思うかよりも、ミーナがどうしたいかだよ。大丈夫、誰に悪く言われたって、私は味方だから。」と話しました。

「私が、どう、したいか...」とつぶやくと、自分を心配してくれる大事な友だちの手の温もりが全身に伝わってきて、久しぶりに不安から解放され、小さな光が胸に灯ったのでした。

■03（シラナイ）

リーヴは人が大好きで、いつも誰かと楽しくおしゃべりをして過ごし、人のことをよく気かけ困っているとすぐに手を貸してくれる好青年でした。けれども、ある時から急に人に対して興味が持てなくなり、何をしても楽しく感じられず、自分の殻に閉じこもってしまったのです。いつの間にか、リーヴは一人であることが増え、誰とも話さなくなってしまいました。

そんなリーヴに、アリエという少女が話しかけてきました。「リーヴ、どうしていつも一人なの？いつも何をしているの？何が好きなの？」と、彼女はリーヴのことを知りたがって、毎日少しずつ話しかけてきました。最初は答えを返さなかったリーヴでしたが、アリエの明るい笑顔と純粋な好奇心に触れるうちに、少しずつ心がほぐれていきました。

次第にリーヴもアリエのことを知りたいと思うようになり、自分からも質問するように。

「アリエは、どんなお菓子が好き？」「休みの日にはどこに出かけるの？」と、リーヴの心は少しずつ開いていきました。

アリエと会話を重ねるうちに再び人と関わる楽しさを思い出し、他の人たちにも興味を持つようになりました。自分の殻から出たリーヴは、もう一度、周りの世界とつながる喜びを感じたのです。

◎

リーヴはいつからか、人に対しても何に対しても関心を失い無気力になっていました。誰とも顔を合わせず、長い間一人で過ごす時間は彼から食事の味すら忘れさせてしまうほどでした。

カフェでランチをするご婦人たち、昼間から酒場で賑わう漁師たち、街は喧騒で満ちていますが、彼の耳にはほとんど入らず自分の殻に閉じこもっているのです。

突然「ねえ、そんなところで何してるの？」と明るい声が響き、リーヴが視線を向けるより早く隣に腰掛ける少女がいました。名前をアリエといいます。

彼女はニコニコと微笑みながら「このクッキー、そこのパン屋さんで売ってたの。一緒に食べない？」とリーヴの口元に差し出します。断るのも面倒で無言のままクッキーを掴み口に入れると、特に味も感じなかったはずなのに「美味しいね！」とアリエが笑顔に向けた瞬間、ほんの少し胸があたたかくなった気がしました。「こっちのラスクも好きなの。半分あげる！」アリエの無邪気な笑顔と言葉につられ、いつの間にかリーヴも「うん…美味しい」と口にしていました。「そうか、誰かと食べると、こんな味がしたんだっけ。」

「明日も一緒に食べてくれる？」ニコッと笑うアリエに、黙ってうなずくリーヴなのでした。

■04（キョーフ）

昔は前向きで自信に満ち溢れていたカトレア。彼女はいつも笑顔で、新しいことにも挑戦する勇気を持っていました。ところが、ある日、過去の失敗やトラウマが彼女の心を覆い始めました。どんなことをやっても「また失敗したらどうしよう、笑われたらどうしよう」と恐怖心が押し寄せてきて、カトレアは次第に何もできなくなってしまいました。

「大丈夫」と心の中で自分を励ましながらも「でもやっぱり怖い…」と葛藤を続けるカトレア。彼女はひとり、心の闇と戦っていました。

そんな時、クラスメイトのリアムが彼女の様子に気付き声をかけました。「カトレア、どうしたの？」思わず目をそらしたカトレアですが、リアムの笑顔がとても優しくかったので、正直に話し始めました。

「失敗してもいいんだよ。大事なのは、楽しむこと！それが正解だと思うんだ」と、リアムはカトレアに向けてほほ笑みました。

その言葉にほんの少し心の中の不安が薄れるのを感じました。彼女は失敗を恐れるのではなく、挑戦することの楽しさを思い出していききました。失敗してもまた立ち上がればいいと、彼女は心から信じられるようになったのです。

■05（ヒカク）

近頃のレンは、周りの友達と自分を比べるたびにどうしても劣等感に苛まれてしまうようです。

「自分は自分、他人は他人」と心の中で割り切りたいと何度も思い続けてきたけれど、友達の成功や特技を目の当たりにするたびに、自分がとてもちっぽけに見えてしまうのです。

ある日、友だちのポプラが話しかけてきました。「レン、どうしてそんなに暗い顔してるの？」ポプラは不思議そうに言いました。レンはため息をつき「みんなすごいのに、自分は全然ダメだ。何もできない役立たずさ。」と呟きます。

するとポプラはまっすぐにレンを見つめ、「何を言ってるの？レンにはいいところがたくさんあるじゃない！」と言いました。「絵が上手だし、声だってやわらかいし、いつも人のことをよく見ていて、みんなの気持ちを考えてくれる。それって他の人にはない本当に素敵なおところよ。」とポプラは笑顔を浮かべました。

レンは驚きながらも、その言葉が胸に響きました。自分では気づかなかった「良いところ」が、ポプラの目には輝いて見えていたのです。少しずつ、レンの心の中に温かい何かが芽生え、自分をもう少しだけ認めてもいいのかなと思えるようになりました。

【役職物語】（各 500 字程度）

■魔法使い 01

リュミエールの街にリナという魔法使いがいました。彼女が得意とするのは、遠くの人にもすぐに情報を届けることができる不思議な魔法で、毎日街の楽しいお知らせを広めていました。

でもだんだんと、自分の発信よりも他の人の方が人気がある、ということを感じていってしまっていたのです。魔法はそんなに力がないのかな…」と感じ、心は重く魔法を使うことが辛くなっていったのです。

そんなある晩、リナの元に一通のメッセージが届きました。「あなたが発信してくれたお店、とっても気に入ったわ！美味しいパンを食べられて家族みんな朝から幸せなのよ。本当にありがとう！」その言葉を見たリナは、胸がポカポカとあたたかくなりました。

「私の魔法で喜んでくれる人がいた...！」そう思った彼女は、もう一度自分の魔法を信じることにしました。人の目を気にするのではなく、人を幸せにするために。

リナの魔法は、街のあちこちに **#あたたかい光** と情報を届け、みんなの心をつなぎました。魔法の便利さに疲れてしまうこともあるけれど、それでも人やものの縁を結ぶ素晴らしい力があるんだと、リナは感じる事ができたのです。

■魔法使い 02

ロウは、小さな火花を起こすだけのちっぽけな魔法しか使えない自分に悩んでいました。他の子たちは空を飛んだり光を操ったりと、すごい魔法を使えるのに、自分には魔法使いの才能がないのかなと。

ある寒い冬の日、ロウは森の中で凍えながら動けなくなってしまったおじいさんを見つけます。そばには火の消えたランタンがありました。

「僕の小さな火花なんて何の役にも立たないかもしれないけれど...」そう思いながらも、勇気を出して魔法を使い、ランタンに火を灯しました。けれど、これだけでは寒さをしのげないと感じたロウは、森の中で小枝や枯れ葉を集めました。

そしてその下にランタンの火を移すと、小さな炎がパチパチと音を立てながら燃え始め、焚き火の温かい光が広がり、おじいさんの体も心も次第にあたたまっていきました。おじいさんはにっこり笑い「ありがとう、小さな魔法使いさん。きみは命の恩人だよ」と感謝の言葉をかけました。

ロウはその時気づきました。「たとえちっぽけな小さな魔法でも、工夫次第で誰かを助ける力になれるんだ」と。ロウは自分の魔法に自信を持ち、もっとたくさんの人の助けになりたいと前を向くことができたのでした。

■商人 01

リュミエールの街にある小さなベーカリーでは、店主のアンナが焼く美味しいパンのおかげでいつもお店にやってくる人々に笑顔が溢れていました。

ある日少年が店に訪れ、一番安いパンを掴むと棚にお金を置き、無言で立ち去って行ってしまいました。それを見ていたお客のマーニー夫人は「無愛想な子だねえ。いったいどんな育ち方をしたんだか。」とぼやきますが、子どもを亡くしているアンナにとって、そんな少年のことが気になってしまうのでした。

ある寒い日のこと、少年が再び店に訪れるとアンナは「今日は試作のチーズパンがあるの。味見してみて」と声をかけ、焼きたてのパンを手渡しました。驚いた少年は一瞬戸惑いますが、受け取っておずおずと口に運ぶと、彼の心に温かい何かが広がります。それは、幼い頃に両親を亡くした彼にとって、長い間忘れていた「誰かに大切にされる感覚」でした。アンナのさりげない優しさが、少年の孤独な心に小さな光を灯したのです。

「次に来る時は、おすすめのパンを買うよ。」とぼつりとつぶやく少年に、アンナは笑顔で頷きました。その日から、少年は少しずつアンナや街の人々と打ち解けていったのでした。

■商人 02

商店でいろんな雑貨を売るカイルは、若い頃は身寄りもなくとても貧乏でした。お金を稼ぐことに一生懸命で、どうにか自分で生きていく力を身につけるため必死の毎日でした。お店を始めてからも、どうしてももっと儲けられるかで毎日頭を悩ませているのでした。

ある日、店に貧しい職人が訪れ「お金が足りないのですが、先に少し材料を分けていただけませんか？必ずいい楽器を作ってその売上で支払います。どうか助けてください。」と相談にやってきたのです。

カイルは迷いました。「何の保証もないし自分が損するだけじゃないか？」と。でも過去の出来事を思い出し、ふと気づきます。自分もある人の小さな助けでここまで来られた。あの時ももらったチーズパンはとてもあたたかかった、と。

「いいだろう、君の情熱を信じるよ。」とカイルは材料を分けてあげることにしました。

数週間後、職人は約束通り美しいリュートを作ってカイルの店に戻ってきました。彼の作る楽器はお店で大人気となり、とても繁盛しました。

「先に誰かを助けることは、巡り巡って自分を助けることにもなるんだな。あの人もこんな気持ちだったんだろうか。」カイルは、懐かしい気持ちで心を満たされるのでした。

■職人 01

家具職人マイラが大好きなおじいさんは、素晴らしいランタンを作る人ですが、長い旅に出たままずっと帰ってきません。マイラはおじいさんが帰ってくる日を信じて、彼のランタン屋を守るために毎日家具を作り続けお店を開いていました。

子どもの頃、おじいさんが作った店中のランタンの明かりの下で、おはなしを聞くのが大好きでした。

「このランタンはルミナスオーブから灯りをもらっているんだよ。だから人々の絆や温もりを感じる。わしはこれが好きなんだ。」とおじいさんはほほえみながら教えてくれました。その時の思い出は今でもマイラの心をあたためています。

彼女はその気持ちを家具作りにも込めているのです。彼女の手で生まれた棚やベッドや椅子はどれもデザインが美しいだけでなく、触れると温もりを感じるような家具ばかりでした。

彼女の家具は、リュミエールの街の人々にとってただの道具ではなく「リュミエールの絵本」と同じくらい思い出や温かさを持つ素晴らしいものなのです。おじいさんの帰りを待ちながら、彼女の心にはずっと希望の光が輝いているのです。 **ランタンの絵**

■職人 02

街外れの山小屋に楽器職人のアリオスという青年がいます。かつて名の知れた職人で裕福な暮らしをしていましたが、人を信じすぎたあまり騙され、全財産を失ってしまいました。それ以来彼は人を信じることができなくなり、ひっそりと暮らしていました。

ある日、街角で美しい歌声を響かせる吟遊詩人の少女に出会います。彼女の歌声は、人間不信で荒んだアリオスの心を優しく包みました。しかしある時、彼女のリュートが壊れてしまい歌えなくなってしまう。アリオスはどうしても新しいリュートを作ってあげたいと願いますが、材料を買うお金がありません。

思い切って街の商人に材料を貸してほしいと頼むと、商人は彼の誠実さと情熱を信じ、材料を提供して

くれました。アリオスは自分を信じてくれた商人の厚意とあの優しい歌声への感謝に突き動かされ、毎晩遅くまで作業を続けました。木を削り、音を調整し、心を込めてリュートを作り上げます。

完成した楽器を少女に手渡すと、彼女は感激し再び優しい歌声を響かせました。その瞬間、アリオスは人々を信じる気持ちを取り戻し、冷えきっていた心に暖かな火が灯るのを感じました。二人への恩返しを果たした彼は、再び人々のために楽器を作り続ける決意を固めるのでした。

■吟遊詩人 01

優しい歌声を持つ吟遊詩人の少女サラには魔法使いの友人がいて、二人はお互いを励まし合いながらそれぞれの技術を磨いていました。サラは友人が落ち込んでいる時に心を込めて歌い、元気づけることが大好きでした。しかし友人にとっては、サラの才能が少し心苦しく感じられることもあったようです。ある日、大切なリュートが壊れてしまいサラは悲しくなりました。もしかしたら、彼女が壊してしまったのではないかと思ったのです。友人を疑ってしまったことが心にひっかかり、サラは自分を責めるようになって歌うことをやめてしまいました。

その時、ある楽器職人が彼女の元を訪れ、サラのために新しいリュートを作ってくれたのです。彼はサラのファンでした。彼のあたたかな言葉と共に贈られた楽器を手にしたとき、心がほっとあたたかくなりました。

彼女の歌声が響き渡ると、周りには人々が集まりました。友人もその姿を見て嬉しくなり、二人の絆はさらに深まりました。サラはこれからもリュミエールの街に優しさと希望のメロディを届けていくのでした。

■吟遊詩人 02

世界を放浪するシオンという名の吟遊詩人がいました。彼の歌声は美しいメロディーで愛の物語を語り、聴く人々の心を惹きつけました。しかし、彼の心の奥には暗い影がありました。

シオンはかつて、愛する妻と幼い子どもと幸せな日々を過ごしていましたが、その子どもは病気にかかり早くにこの世を去ってしまったのです。妻は深い悲しみに沈み、シオンはそばにいて彼女に辛い出来事を思い出させさらに苦しめてしまうと感じ、愛する妻のため身を引く決断をしたのです。

それ以来、シオンは世界を旅しながら、人々の愛のドラマを歌い続けています。

彼は様々な場所で出会った人たちの物語を歌にのせ、人々の笑顔や涙が心の支えとなっています。

ただ、どんなに美しい愛の歌を歌っても、彼の心の中の二人が消えることはなく、遠く離れた愛する妻への想いと、もう一度子どもに会いたいという願いがあるのです。彼は歌うことで自らの悲しみを癒し、人々に少しでも前を向く力を届けようと旅を続けています。

「大丈夫、眠るときにランタンは消すが、心の灯りまで消えてしまうわけではないさ。」

■探偵 01

彼は目に見えないものが見える探偵、名前をアシュトンと言いました。

ある日、彼は街で起きた小さな事件を調査することになります。美しい歌声を響かせる吟遊詩人のリュートが壊れてしまったというのです。一体誰がそんなことを…？その楽器が壊れた理由を知るため、アシュトンは調査を始めました。

彼が周囲を見渡すと、すぐに不思議な存在に気がつきました。少し怯えた様子の少年のゴーストがこちらを見ているのです。アシュトンには彼に近づき優しく問いかけます。「君は、このリュートが壊れた理由を知っているのかい？」

少年はゴーストである自分に話しかけてきたアシュトンに驚きますが、ぽつりぽつりと話し始めました。吟遊詩人だった父を思い出し、リュートを手にしようとした結果ポルターガイストを起こしてしまい、地面に落として壊してしまったというのです。彼の願いは純粋で、愛する父の音楽を奏でただけでした。

その真実を持ち主に伝えると彼女は驚きましたが、どこかホッとした表情に変わりました。

それを見たアシュトンは、謎を解いたおかげで彼女の心も解れたようだと安心したのです。

この話は相棒の探偵エリスにもぜひ聞かせてあげたいな。

■探偵 02

リュミエールの街に、ひとときわ静かな探偵エリスがいました。最近、街を照らすリュミナスオーブの光が弱まっていることに気づいた彼女は、その原因を探し始めました。調査を進めるうちに、彼女は「黒い影」と呼ばれるものが関わっていると知ります。その影は、人々の心に潜む不安や恐れから生まれたものでした。影には「イソガシ」（忙しさ）や「フアン」（不安）、「シラナイ」（未知への恐れ）などがあり、住民にとりつき街の光を奪っていたのです。

しかし、彼女にはその影の姿が見えません。見えるのは、目に見えないものを捉えられる相棒のアシュトンだけ。二人は力を合わせて影を追います。

彼女はあることに気づきました。この影を消し去るには、人々が自分の心の不安や恐怖と向き合い、それを乗り越えることが大切だと。そしてそのためには何よりも人と心を分かち合うことが必要だと感じたのです。このことをどうにかしてみんなに伝えないと！情報を伝えてもらうためには魔法使いや吟遊詩人に頼るのが一番だわ。

【エンディング】

ついに集めたページが「リュミエールの絵本」に戻されると、その瞬間街の中心に位置する「ルミナスオーブ」がまばゆい光を放ち始めました。最初は微弱だった光が、住民たちの喜びや感謝の念によって、次第に強く、温かくなっていきます。

周囲の薄暗さが晴れていき、夜空に広がる星々が照らす中住民たちの心の距離は徐々に縮まり、笑顔や温もりが街に戻ってきました。かつての賑やかさが蘇り、市場では楽しげな声が響き渡ります。人々は互いに対話を重ね、心を通わせることで、絆を深めていくのです。

「ルミナスオーブ」の光は、単なる魔法の力ではありませんでした。黒い影が去り、再び街に明るさが戻ると「ルミナスオーブ」は以前にも増して美しく輝きました。

「本当の魔法は、人々が互いに支え合い、共に喜びを分かち合うことで生まれる」ということをみな感じ取っていました。彼らの目には、孤独を乗り越えた温かい未来が広がっています。リュミエールの街はこれからもその光を守り続け、希望の象徴として人々の心に永遠に輝き続けることでしょう。

